

歌唱表現 (第1報)

— 歌詞 —

森 久見子

Expressions in Singing (I)

Lyrics

Kumiko MORI

緒言

長年にわたり、本学文学部児童教育学科において音楽関連科目の指導に携わってきた。そのなかで「歌唱表現」は幼児の保育や教育に携わる者には特に重要な分野であり、正しい発声のもと「美しい日本語」で歌唱しなければならないという信念を持って指導を行ってきた。音楽は幼稚園や保育園での一日の生活には不可欠なものであり、多くの場合は、保育者が子どもに歌って聴かせたり、子どもと一緒に歌ったり、あるいは子ども同志で歌うことなどである。

子どもは出生以前、胎内においてすでに音と関わりがある。人間の聴覚は胎生六ヶ月になれば完成し、音を感じる機能を持っている。胎児は母体を通じて胎内血流音や外界の様々な音を感じている。また、出生後12時間ほどで、人の声とそれ以外の音とを聞き分ける能力を持っていることは確かめられている。子どもはこの世に生まれた時、多くの機能はまだ未分化であるが、聴くという能力は備わっている。

子どもの「歌唱表現」は身近な音楽的な表現として最も早くから現れる。乳幼児は正確に歌うことはできなくても、聴く「耳」は十分に機能している。それゆえ、保育者は子どもに歌って聴かせる時や一緒に歌う時には、正しく歌唱しなければならない。保育者は、子どもが心身ともに発達して物事の判断を自分ですることができるようになった時に、正しい判断ができるように導いていかねばならない。些細なことであるかもしれないが、正しい発音で歌唱することもそのひとつであると考えている。

昨今、死語とか国語力などがしばしば取りざたされているが、日本語の発音については問題になったことはない。テレビやラジオから流れてくる話し言葉や歌唱では、個性や独創性が強調され尊重されていることが多い。それらを全て否定するつもりはないが、子どもの大切な成長期に関わる保育者には、日本語に対して意識を持ち「子どもの歌」を正しく、美しく歌ってくれることを願って指導している。

平成17年度より本学短期大学部保育学科の音楽関連科目の指導に携わるようになり2年が経過した。「歌唱表現」については、これまでと同様に発音に留意して歌唱するように指導してきたが、今回初めて「子どもの歌」の歌詞に関する意識調査を行った。そして、その結果をもとに、本学科におけるより効果的な指導法を作成することにする。

指導内容

本学科の音楽関連科目は、1年前期に「基礎技能（音楽1）」、後期に「基礎技能（音楽2）」が、2年前期に「表現1（音楽）」が開設されている。

「歌唱表現」の基礎は「基礎技能（音楽2）」で行っている。この授業は1クラスを二分して「歌唱表現」と「ピアノの個人指導」とを45分ずつ15回で学習している。「歌唱表現」の授業形態はグループ授業のため、個人指導ではない点に充分留意して行っている。そのひとつとして、ピアノの個人指導の主たる内容が「弾き歌い」であることから、常にピアノの個人指導者全員と連携を取り、一人ひとりの情報を得てグループ授業に役立てている。「歌唱表現」の授業の第一の目標は発声法（呼吸法も含む以下同じ）を学習し正しい音程と正しい発音で「子どもの歌」を歌唱できるようにすることである。加えて、できる限り多くの「子どもの歌」を無伴奏で歌唱できるようにすることも重要なこととして指導している。

発声は基礎的な発声法を繰り返し練習することにより、正しい発声法を身につけ「話す声」とは異なる「歌う声」で歌唱することを認識させている。さらに、積極的に声を出すという習慣も身につけるように指導している。音程の不正確さは多少のことであれば正しい発声を身につけることで修正できる。しかし歌い出しの音が取れない場合や、ピアノの音を聴いても歌うことができない場合、歌唱中にまったく違う旋律になってしまうような場合には、そのつどその学生に合った練習方法を教えている。

発音について母音は「あ、え、い、お、う」の唇や口腔の開け方を説明して、あいまいな発音にならないようにすることと、子音についてもおろそかにしないで、はっきりと発音することを指導している。促音や鼻濁音については正確に発音することを繰り返し指導し、擬声語や擬態語も意識して歌唱させるようにしている。また、歌唱時の顔の表情は、子どもとのかかわりや、声の明るさなど発声に関してとても大切なことなので、顔の表情にも気をつけて歌唱するように注意している。

詩については、「子どもの歌」であっても詩をよく読み、詩の内容を把握して歌唱しなければならないことは言うまでもない。しかし、日本語の詩は多くの場合1音符に1シラブルが当てられ、しかも楽譜には平仮名か片仮名で付記されているため、音符に付された文字を読み歌唱するということのようなことが間々あると思われる。従って、音符に付された文字を羅列して読むのではなく、言葉として詩全体をよく読むことの必要性を指摘している。

以上の指導内容をもとに、平成17年度および18年度の「基礎技能（音楽2）」における「歌唱表現」の授業を行った。

アンケート調査

調査目的

平成18年度（以下18年度）1・2年生にたいしては「基礎技能（音楽2）」で学習した「歌唱表現」の指導についての反省点を知り今後の指導内容に生かすことである。

平成19年度（以下19年度）1年生は、「基礎技能（音楽2）」を履修した18年度1・2年生との比較および19年度1年生に対する「基礎技能（音楽2）」の指導内容に役立てるためである。

調査対象

歌唱表現（第1報）

本学科の18年度1・2年生と19年度1年生を対象に行った。以下に、調査対象の学生数と回答者数、および回答率を順に記す。

18年度1年生	80名	72名	90%
18年度2年生	108名	85名	78.7%
19年度1年生	88名	87名	98.9%

実施時期

18年度1・2年生 平成19年1月

19年度1年生 平成19年4月

調査方法

質問紙法とし、その内容は以下のようなものである

「子どもの歌」を歌唱するときの歌詞に対する意識調査

(I) 発音について

(○で囲んでください)

- 1) 母音を正しく発音することを意識していますか？ はい いいえ
- 2) 子音をはっきりと発音するように心がけて歌唱していますか？ はい いいえ
- 3) 促音を意識して歌唱していますか？ はい いいえ
- 4) ガ行を鼻濁音で歌うことができますか？ はい いいえ
- 5) 擬声語を意識して歌っていますか？ はい いいえ
- 6) 美しい日本語で歌唱していますか？ はい いいえ
- 7) 6)で「いいえ」と答えた方は理由を書いてください。

(II) 言葉の意味について

- 1) 一つひとつの言葉のいみを伝えるように歌唱していますか？ はい いいえ
- 2) 詩の中の「？」や「！」を意識して歌唱していますか？ はい いいえ
- 3) 詩の内容がよく伝わるように歌唱していますか？ はい いいえ
- 4) 3)で「はい」と答えた方はどのようなことを心がけておられるのか書いてください。

調査結果および考察

調査結果を「はい」回答（以後「肯」）のみの数値でまとめた表を項末に記載する。

(I) の設問について

1) から 5) までの「肯」数は18年度1年生（以後1年生）と18年度2年生（以後2年生）は同じ約半数であるが、19年度1年生は約2割である。このように19年度1年生より「基礎技能（音楽2）」をすでに履修した1・2年生のほうの数値が高いことは、ある程度の学習成果として読み取れるのかもしれない。しかし1・2年生については期待していた数値よりかなり低い。1)の母音と2)の子音を比べると母音の方が1・2年生ともに高い数値になっている。19年度1年生は1)、2)ともに2割弱である。

6) では3グループともに「肯」数値が1) から 5) までより高くなっている。その理由と

してまず考えられるのは、日本語は母国語であるため、特に注意を払わなくても発音できていると思っているのではないかということである。次に、6)の「いいえ」回答(以後「否」)について7)で記述回答を求めているために、記述することを回避したのではないかということが考えられる。6)の「否」は1年生12名、2年生13名、19年度1年生33名で、記述回答があったのはそれぞれ10名、8名、32名である。7)の記述内容をまとめたものと、()内に回答者数を以下に記しておく。

1年生

- ・自分で歌えているかどうかわからない。(3)
- ・「美しい日本語」とは何かわからない。(3)
- ・まだ声のでていないから。(1)
- ・音を出すことを最優先してしまっている。(1)
- ・ピアノを弾くことで精一杯でした。(1)
- ・滑舌が悪くて歌詞をかまないことに集中するから(原文)。(1)

2年生

- ・気にせず、何となく、意識をしていない。(3)
- ・「美しい日本語」とは何かわからない。(1)
- ・大きい声で歌うようにしているから。(1)
- ・出ないと(声のことか?) そうしたくてもできない。(1)
- ・レッスンが大切だと思った。(1)
- ・問いが理解できない。(1)

19年度1年生

- ・何となく、気にしない、意識をしていない。(15)
- ・「美しい日本語」とは何かわからない。(8)
- ・自分ではわからない。(3)
- ・あまり歌わないから。(2)
- ・歌うことが難しいから。(2)
- ・美しい日本語でないと思うから。(1)
- ・美しい日本語について学んだことがないから。(1)

1・2年生の「美しい日本語とは何かわからない」や2年生の「気にせず、何となく、意識をしていない」はたとえ少数でも大きな課題である。授業で繰り返し伝えた「正しい発音の美しい日本語で歌唱表現すること」に対する十分な成果が得られていない。この回答は19年度1年生でも第1位と2位を占め、数は15名と8名であるが記述回答は32名で全体の3分の1強である。もし記述回答をしなかった学生にたずねたとすればやはりこの回答が多いのではないかと推察される。

(Ⅱ)の設問について

1)と2)の「肯」の数値は1年生と2年生はほぼ同じで、(Ⅰ)の1)から5)よりやや高い数値となっているが、この数値についても(Ⅰ)と同様に期待値より低い。

3)は1・2年生ともに(Ⅰ)の6)より20%強下回っている。3)で「肯」を選んだ場合には4)で記述回答があるため(Ⅰ)の6)とおなじ理由があるのではないかと推察される。歌唱技術とは別の問題として一つひとつの言葉の意味と全体の内容、また保育者の気持ちを伝えるような表現で歌唱することを学習しているので100%に近い数値が得られると予測していた。

19年度1年生については、全体が（Ⅰ）より（Ⅱ）の数値のほうが高くなっているが、言葉の発音ということより言葉の意味や内容についての質問の方が理解できたのかもしれない。

3)の「肯」は1年生41名、2年生53名、19年度1年生26名で記述回答があったのはそれぞれ23名、33名、25名である。4)の記述内容をまとめたものと、()内に回答者数を以下に記しておく。

1年生

- ・具体的な表現方法（強弱、速く、遅く、やさしくなど）を記入。(7)
- ・感情をこめて。(5)
- ・歌詞のないようを理解する。(3)
- ・手や体で動作をつける。(3)
- ・情景を思い浮かべて。(2)
- ・発音をはっきりと。(2)
- ・曲のイメージに合った歌い方。(1)

2年生

- ・詩の内容を理解する。(7)
- ・感情をこめて。(6)
- ・声を変えたり、強弱をつける。(5)
- ・伝えたいことが伝わるように。(4)
- ・情景などを想像する。(3)
- ・言葉を大切にする。(3)
- ・強弱をつける。(3)
- ・フレーズを意識して歌う。(1)
- ・語りかけるように歌う。(1)

19年度1年生

- ・気持ちをこめて(9)
- ・詩の内容を理解する。(3)
- ・情景、背景、曲の感じを考える。(3)
- ・相手に伝わるように。(3)
- ・作曲者の気持ちを考える。(2)
- ・強弱をつける。(2)
- ・嬉しそうに、楽しそうに、悲しいところはゆっくりと。(2)
- ・はっきりと歌う。(1)

1年生と2年生では具体的な表現方法が書かれたものが多かったが、上記の記述内容が総合的に記述されることを期待していた。19年度1年生は3)の「肯」は少ないものの4)の記述回答率は96.2%と高くその内容もよかった。

表 調査結果集計表

設問内容	1 年生	2 年生	19年度 1 年
(Ⅰ) 発音について			
1) 母音を正しく発音することを意識して歌唱していますか	76.4%	61.2%	17.2%
2) 子音をはっきりと発音するように心がけて歌唱していますか	54.2	49.4	19.5
3) 促音を意識して歌唱していますか	44.4	48.2	12.6
4) ガ行を鼻濁音で歌うことができますか	45.8	49.4	23
5) 擬声語を意識して歌っていますか	56.9	51.8	19.5
6) 美しい日本語で歌唱していますか	80.6	84.7	61.2
7) 6) で「いいえ」と答えた方は理由を書いてください	83.3	53.8	97
(Ⅱ) 言葉の意味について			
1) 一つひとつの言葉の意味を伝えるように歌唱していますか	79.2%	75.3%	43%
2) 詩の中の「?」や「!」を意識して歌唱していますか	65.3	63.5	31
3) 詩の内容がよく伝わるように歌唱していますか	56.9	62.4	29.9
4) 3) で「はい」と答えた方は理由を書いてください	56.1	62.3	96.2

*表の数値は「肯」の回答率。但し、(Ⅰ)の7)は6)の「否」回答数の記述回答率。(Ⅱ)の4)は3)の「肯」回答数の記述回答率。

結語

今回行ったアンケート調査の結果から多くのことを知り得た。日本語の発音や歌詞については、授業の中で毎回同じことを繰り返し指導してきたにも関わらず、意識さえ持たれていないことが判明した。たとえ現時点で満足な歌唱法が習得できていないとしても、歌詞に対する意識は持つようになっているものと確信していた。日常の会話では母国語である日本語を意識して話すことはまず皆無であり、その延長線で無意識のまま歌唱してしまうということかもしれない。しかし、このことこそ重大な反省点として捉えなければならない。何事も意識を持つか持たないかで習得の度合いが違ってくことを認識し、それに関心を持つということが加われば大きな収穫が得られるはずである。

上記のことを踏まえ、また「基礎技能(音楽2)」は半期だけという時間的制約のあることを考慮して、最も効果的な新しい指導法を作成しなければならない。まず、これまで通り発音については口頭による説明と実際に歌唱して指導することに加えて、母音の口腔内の開け方の図を配布し視覚と聴覚を使い、これまで以上に「発音」ということを印象づけることにする。次に、一人で歌唱させる回数を増やし、そのつど助言をして、正しく「歌唱表現」しようという意識を強く持たせるようにする。その際には、歌唱することをためらうようになったり、嫌いにならないように配慮をしなければならない。また、授業で学習した「子どもの歌」以外に、できる限り多くの「子どもの歌」を歌唱できなければならないことを実感させ、各自が自発的に「子どもの歌」を学習して、歌唱できるレパートリーを増やすように努力させる。そうした努力をすることにより歌唱時の発音や歌詞についての意識が高まり、「子どもの歌」に対する関心が強まることを期待する。

今回の調査結果に対応するために前述のことを主軸とし、且つピアノの個人指導を含む総合的な見地から本学科の「基礎技能(音楽2)」の指導内容を作成することにする。新しく作成し

た指導内容による「基礎技能（音楽2）」の授業を行った後に、再度アンケート調査を行いその結果を次につなげていきたいと考えている。

次回の調査は質問方法と内容を一部変更して、また記述回答については全体から得られるものとし、できる限り多くの学生の感想や意見を得ることができるようにする。

日本語は母国語であるがために安易な気持ちで歌唱してしまうのかもしれないが、母国語だからこそ正しく、美しい日本語で歌唱しなければならないということにこだわって、今後も指導をしていきたいと考えている。

英文要約

I have been teaching “vocalism” with the belief that childcare workers should sing with precise pronunciation in “beautiful Japanese”. This first questionnaire survey was conducted mainly for improving my lessons from the results.

The survey targeted 3 groups of students in the Early Childhood Department of our junior college division, the first- and second-year students enrolled in 2006 and the first-year students enrolled in 2007, respectively. The questionnaire was made up of two parts: part (I) was designed to investigate whether the students were conscious of the pronunciation such as vowels and consonants in singing; part (II), whether they were conscious of the meanings of the lyrics. The questions were answered with “yes” or “no”. Both part (I) and part (II) contained one descriptive question.

The results of the survey show the number of juniors and seniors who answered affirmatively to the questions was far fewer than expected. Japanese is their mother tongue, so they are apt to sing Japanese songs easily and unconsciously. All the more because Japanese is their mother tongue, I do hope they sing Japanese songs in beautiful Japanese. I hope to make good use of this survey's results in the future. I will try to make the teaching points clear from newly enrolled students' responses, and I will also consider the points for improvement and find the way to teach the new students more effectively from juniors' and seniors' responses.

I plan to change the questioning methods and some of the questions for the next questionnaire. I will also administer it again to the newly enrolled students after they complete “basic skill (music 2)”. I will examine the results and make good use of them for future lessons.

参考文献

- 1) 大畑祥子・川上清文・遠山文吉編「子どもと音楽—2子どもの発達と音楽」同朋舎（1987）
- 2) 大畑祥子編著「保育内容 音楽表現（第2版）」建帛社（2002）